

福富健男句集『鳥瞰図』について

福富健男『鳥瞰図』、海程新社、平成二十二年十一月二十三日発行、本体価格一〇〇〇円

Yuji MATSUMOTO

松本 勇二

福富健男は実に行動的な人である。何かの大会で遠出するときも、その前後に必ずその近辺の旅を挿入してくる。十四、五年前立山で同宿したことがある。部屋割りは松山のYと筆者と福富である。丁度二十の年齢差がある私たちが緊張して挨拶すると、あの柔和な笑顔を見せながら大きなリユックから焼酎を取り出し、こちらに差し出した。それだけで一気にうち解け夜中までいろいろな話を聞かせていただいたのをよく覚えている。そのときも、どこか山歩きをしてからイベントに参加していたようであった。

そんな福富健男の世界旅吟句集『鳥瞰図』が発刊された。題字は海程金子兜太主宰が書く。その骨太の字体が、福富の人間性を表すようである。句集は略歴によると第八句集のようであるが、平成十九年に上梓された「風景」(現代俳句協会発行)が抜けているようだ。福富の大きさが出ていて好ましい。他にも多くの随筆集や評論集があり、その表現活動は実に旺盛だ。

『鳥瞰図』は年代で仕切り逆年代順に配置した三部構成になっている。もちろんそのほとんどが海外詠である。

第一部(1994～09)は宮崎県庁を退職する直前から退

職後の期間である。アジア、ヨーロッパ、太平洋諸島、アメリカの数十カ国を旅しての作品群だ。

難民集うアンモナイトは黒く渦巻き

雪嶺遙かにカトマンズの街寝息たてず

薪を焚いて屍燃やす昼の河岸

同緯度の妻も見上げる段畑の月

「アジア」という部立ての中の、ネパールという章の数句である。金子兜太主宰に添削される度に「もつと簡潔に」という指導を受けていたと後書きに記す福富であるが、その長さを一向に変えようとしていないことが分かる。形式に無理して詰め込むには、見聞きしたものの情報が多過ぎるため、このような書き方になるのだろう。しかし、この書きたいことを書きたいように書いた句から、妙にリアルな情景が迫ってくることは確かだ。これこそ、昭和三十八年に二十七歳で宮崎俳句研究会に出席して以来、営々と俳句を書き続けてきた福富が決して譲らない手法なのであろう。

あでやかに逆流現れて深夜の晴れ

さそり唐揚げかつかさくさく舌に食む

草原晩夏腹這いすむ長い貨車

中国行は国単体では最も作品数が多い。地名だけでも十四を数える。中国大陸の夜は壮大だ。空を見上げて、ただで自分の全てがとて小小さく思えてくる。一句目にはそんな気分が投影されている。二句目のざっくりとした把握は福富のお家芸でもある。

ドリアン抱いて越南の旅妻は朋友

地続きに乳熟期の稲日韓和平

ベトナムと韓国での作品。昭和四十年小児科医であった江藤あつ子を娶った福富は、この半世紀数限りない旅を夫婦で体験して

きた。ペトナムにも同行した婦人への視線は信頼に溢れている。

にれの緑陰鳳仙花のようなフランス人

初老の妻にあけっぱなしの雪の空

森の障壁どろんと溶けた入日かな

レーニン像に真向い始発駅ウラジオ

若い果実を根際に固めズッキーニ

姫りんご枝にたわわなサーカス団

「ヨーロッパ」から数句引いた。地名だけでもパリからモスクワまで十五を数える。ズッキーニや姫りんごへの注目は、昭和三十五年宮崎県に採用され、農政畑一筋に歩んだ福富ならではの視線であろう。途中農業大学校長等を歴任し平成七年退職した福富には果樹や農作物の様子がどこへいっても気になっているようだ。特に「根際に固め」の把握は真骨頂であろう。ヨーロッパ諸国の旅でも、婦人へのいたわりは変わることはない。母を恋う森の空地に脱糞し

島の儀式か丸太に赤い茸ふやし

海沖に虹を立たせる妻との旅

「太平洋諸島」の旅では感情移入の句が目についた。脱糞の一瞬、誰かの名を叫んだりする経験は誰でもあると思われるが、それを見事に書き留めている。

自由な甲板異人街から摩天楼

レモンジュース喉に滲むよ黒人霊歌

鮪の鎌のような雲の夜景に降りる

力尽くで皆びしょ濡れに滝を見る

「アメリカ大陸」の旅は第三部でも三十数年前のものが出てくるが、この最近のアメリカ行には福富の知的処理を経た作品が多く並ぶ。自由な甲板や鮪の鎌の斡旋、レモンジュースと黒人霊

歌の対比、ナイアガラを力尽くで見る、あたりにそれが顕著だ。

第二部（1968～1987）は著者三十二歳から五十一歳の作品である。全十二章は都市の名前を冠したものが多く、範圍は奄美からバキスタンである。

さわさわ穂ざかりの黍豚骨やわく煮る

多産な家族ビル中階に旗かかけ

僧侶は太陽わにのうにしずんだもの

魔の窟へ鉄砲百合が流れこむ

それぞれ、奄美、香港、バンコク、沖縄から引いた。それぞれの地に根付いている風土が身体感覚で伝わってくる。県庁職員として活躍する一方での旅であったこの頃は、その多忙への反発からか、感覚が澄んでいる句が多い。大いにリフレッシュできた旅であつたらう。

大鷲の肩黄昏の木の梢にあり

ペシャワルの旅においても同様に感覚が冴えている。

第三部（1965～1966）は、国際農友会農業実習生としてカリフォルニア州に渡つた年と翌年あつ子夫人を伴いアメリカ一周旅行をした折りの作品群である。

故郷に背を向けかわいた陸へ黄色い尿

翳もたぬ二世盛りあがり咲く百日草

霊柩車紅葉吸いこむぼくらの休暇

ドラム缶ぶちで僕のシャツ燃え派手な帰国

妻の言葉遠退き丘の白い墓石群

若さ溢れる、当時の前衛俳句臭も若干ある句群だ。あまりにも大きな想念を詰込むため言葉が形式を溢れているのは否めない。福富健男の半生を逆から追ってきたが、とにかくエネルギーシユであつた。まさに「元氣こそ俳句」である。